精神の概念としての自己意識

――ヘーゲル『精神現象学』、自己意識論の分析――

鈴木　覚

はじめに

ヘーゲルは最初の哲学的著作である一八〇一年の『フィヒテとシェリングの哲学体系の差異』において、「絶対者が意識に対して構成されるべきである。これが哲学の課題である」(1)と述べた。これ以降ヘーゲル哲学は一貫して絶対者の哲学であったと言うことができる。絶対者の哲学である、というのは、絶対者を対象とする哲学であるという意味と、絶対者自身がみずからを知る哲学的主体であるという意味とを併せ持っている。このような絶対者観を可能にしたのは、彼の「精神」概念である。「絶対者は精神である。これが絶対者の最高の定義である」(2)と言われるように、絶対者を精神と捉えることによって、ヘーゲルは精神を基点とする一元論的な絶対者の哲学体系を構築することができたのである。だがそもそもこの精神とは一体何であろうか。精神 (Geist) という言葉から、まずもって想定されるのは聖霊 (der Heilige Geist) であろう。しかしながらヘーゲルの精神概念は、聖霊概念に付随する神秘性は有していない。あくまで哲学的な概念である。

小論の主題はこの精神概念を解明することである。しかしながら豊かな内容を包括しているヘーゲルの精神概念をここで全面的に解明することはできない。ここでは、一八〇七年の『精神現象学』(以下『現象学』) の自己意識論を取り上げることにする。自己意識論は、実践哲学的問題関心から取り上げられることが多い箇所であるが、ここでは精神という観点から考察する。自己意識はヘーゲルによって「精神の概念」と規定されている(3)。「精神の概念」である自己意識を分析することによって、精神の根本構造が明らかにされるであろう。この分析はヘーゲルの精神概念を全面的に解明するものではないにしても、その目的のための不可欠の予備的作業として位置づけられる。

一　対象意識と自己意識

『現象学』は周知のように、自然的意識が様々な経験を重ね、

最終的に絶対知へと至る意識の形成過程を描いた著作である。自己意識も「(対象)意識」の運動の結果生じたものである。『現象学』にはいくつかの重要な切れ目、転換点が存在するが、「意識」から「自己意識」への転回もその一つである。しかもその転回は特別の意義をもっている。「自己意識」が「意識」と並んで、『現象学』全体を貫く基本タームとなっていることからも、それは伺える。自己意識がそれほどの意義をもっているのは何故か。まずこの点を、対象意識との比較によって明らかにしたい。

対象意識の段階では、真なるものは意識自身とは別のものであった。対象意識にとっての真なるものとは、対象の自体存在であった。しかし対象意識の最終段階である「悟性」の運動の結果明らかになったことは、意識は自分とは他なるものに向かっているつもりで、実は自分自身に対しているということである。すなわち、自体存在といえば、カントの物自体にみられるように、通常は、意識から独立し、意識によっては捉えられない何ものかを意味する。しかしながらヘーゲル的発想からすれば、こうした枠組みこそが問題なのである。自体存在といっても、それは意識がそのものを自体存在として措定しているにすぎず、結局は意識が措定した自体存在、すなわちそれは何ら自体ではなく意識に対する存在、対他存在にすぎないのである。意識は自分が設定したものと向き合っているだけなのである。このことが示されるのが「悟性」なのである。

このように「悟性」において、対他存在と自体存在、知と真、現象と本質の一致が見られる。ところでこれは「意識の経験の学」としての『現象学』が目指すところのものである。ではここで「意識の経験の学」の叙述が終わってしまうか。もちろんそうではない。叙述は続いていく。その理由はこの著作特有の二重視点にある。『現象学』では、様々な段階で様々な経験をする共時的な「当の意識」と、その経験を通時的な視点から眺める「我々」、の二重視点がある。先の対他存在と自体存在の一致という事態は、実は「我々にとって」のものであり、「我々」からの説明だったのである。悟性自身は、実際は自分自身に対しているということを自覚してはいないのである。当の意識自身がこの境地に自覚的に到達することが「意識の経験の学」の目標なのであり、このため叙述が続いていくのである。そして、この対象のうちに自己を見出す運動の担い手こそが「自己意識」なのである。対象と自己との一致が意識そのものにおいて可能となるのが「自己意識」であり、それゆえヘーゲルは「かくして我々は自己意識とともに真理の故郷に歩み入ったのである」(4)と言うのである。

二　欲望と生命

1　欲望としての自己意識

自分自身を対象とする、というのが自己意識の根本性格である。これは我々の通常の意識経験から懸け離れたことではない。我々はものごころがついた時から自分を意識している。だ

がこの私についての意識、私は私であるという意識は、他者の存在があってはじめて可能である。自分と異なる他者の存在との区別において、私が私として存在しうる。他者がいなければ自分自身を反省することはない。ヘーゲル自身、「一つの自己意識に対して、他の自己意識が存在する。こうして初めて自己意識は実際に存在する」[5]と述べている。

しかしながらヘーゲルは、自己意識章に入ってすぐに自己意識と自己意識が向き合う場面を描くのではなく、「欲望」と「生命」についてまず論じている。その理由は何か。ヘーゲルの論述に即してその理由を明らかにしていきたい。

ヘーゲルは、欲望を自己意識の最初の形態としている。しかしながら既述の通り、自己意識は自己意識に対して初めて自己意識なのであるから、それは自己意識としての自己意識、あるいは対自的自己意識とは言えない。にもかかわらずヘーゲルが欲望を自己意識としているのは、欲望の運動が自己意識の本質的運動に適合しているからである。食欲を例に取ろう。我々は食欲を感じたとき、目の前の食べ物を無造作に食べる。この対象否定の運動のうちにヘーゲルは哲学的意味を見る。対象を何のためらいもなく否定しうるのは、対象の空無性を確信しているからこそ可能なのである。対象否定とそれによる自己の満足、これが自己意識の運動に適合しているのである。この際、自己意識の運動とは以下のようなものである。

自己意識は自分自身を対象とする。自己意識は自分を自分から区別するが、この区別は区別でない区別であり、そのまま自分自身との統一である。「私は私である」という時、区別はそのまま統一である。しかしながらこの内容が単に主観的、内面的なものに留まるならば、それは全く空虚なものでしかない。例えば「自分は哲学者である」と確信しているとしよう。この確信は自分にとっては真理である。しかし哲学者であると人に認められなければ、全くの独りよがりの空虚な確信にすぎない。つまりそれは本来的な意味での真理ではない。確信が真理となるには客観性を得なければならない。自己意識には、単に内面性、空虚な抽象性にとどまるのではなく、客観性を得ようとする根本傾向が存在する。自己確信を客観的対象との関わりの中で、客観的なもの、真理へと高めるというのが自己意識の本質的運動である。

この観点からすれば、欲望は、自己意識としての自己意識ではないにしても、その運動は自己意識の運動に適っているのである。欲望の運動は、ヘーゲルからすれば、自分自身の存在を確信する自己意識が、自分の存在に比して無に等しい対象を否定し、自分自身の確信を客観の場で確かめる運動であると見なされるのである。

欲望を視野に入れるということは、『現象学』の展開過程から見れば、ここにおいてヘーゲルが現実の人間を問題にしはじめたことを意味する。自己意識章以前の、「感覚的確信」、「知覚」、「悟性」は、対象に対する認識主観としての自我といったものでしかない。それに対し自己意識は、身体を備えた一個の生命体であり、実際に飲み、食い、行動し、他と交わるような

現実的自我である。このことは、次に見る生命論からも言える。ヘーゲルは既述のような悟性からの自己意識の生成を説くだけではなく、改めて生命全体の運動からも自己意識を生成させている。この二重の導出は、生命体としての自己意識を論じる上で、ヘーゲルにとって不可欠の手続きなのである。

2　生命の基本構造

ヘーゲルは欲望の対象として「生命」を論じる。しかしこの生命論の導入は唐突の感を免れ得ない。

「意識にとって否定的なものである対象も、意識が自分の方で自分の内に還帰しているのと同様に、我々にとって、あるいは、自体的には自分の方で自分の内に還帰している。対象はこの自己内反省によって生命となっている。……そして直接的な欲望の対象は生命あるものである。」(6)

「意識が自分の内に還帰している」という事態は、悟性の運動の結果であり、これまでの説明からも理解されうるだろう。しかし「対象が自分の内に還帰している」、「自己内反省によって生命となっている」とは、如何なる意味であろうか。

ヘーゲルが説明に持ち出すのは、悟性の運動で得られた「無限性」の概念である。これは区別されえないものの区別の運動、あるいは、統一と区別の統一の運動を意味する概念である。この概念は一方で自己意識において体現されている。このことは、先に述べた「私は私である」という自己意識の構造を思い浮かべれば理解されうるだろう。この概念が他方で生命において体現されるのだとヘーゲルは言う。両者の違いは、自己意識が無限な統一と向き合い、無限な統一を自覚しうるものであるのに対し、生命の方は無限な統一そのものであって、無限な統一と向き合えず、自覚することができないところにあるという。

「この概念は、自己意識と生命との対立の内に自らを分裂させる。前者は、諸区別の無限な統一がそれに対して存在しているところの統一であり、それに対し後者は、この統一自身であるにすぎず、そのため同時にこの統一が自分自身に対して存在しているのではない。」(7)

ヘーゲルは「無限性」という概念を基に、無限性を体現している自己意識の対象は、同じく無限性を体現している生命であるとするのである。ここにヘーゲルの汎論理主義、論理優先、論理偏重の態度を指摘することができよう。いずれにしても、このようなかたちでヘーゲルは生命論を導入し、ややそれについて詳しく論じている。この生命論は、ヘーゲルにおける普遍と個別の関係、および両者の弁証法的運動を理解する上で重要な箇所である。ヘーゲルの論述を詳細に辿ることにしたい。

ヘーゲルにおける生命とは何かを考えるとき、注意すべきことは、それが何らかの存在者を言い表す概念ではないということである。それはむしろ自然界で働いている無限性を言い表した一種の形而上学的概念である。生命は諸々の存在者を存在せしめるとともにそれらの存在を解消することを通じておのれを維持する普遍である。

生命についてはまず第一に普遍的統一の側面を指摘しうる。

「[生命の]本質は、あらゆる区別が廃棄されてあることとしての無限性、純粋な軸回転運動、絶対に安らうことのない無限性としての自分自身の安らいである。それは運動の諸区別がそのうちでは解消している自立性そのものであり、こうした自同性(Sichselbstgleichheit)においてしっかりした空間の形態をもっている時間の単一な本質である。」[8]

この場合の区別と呼ばれているものは、統一としての生命に対する区別、すなわち個々の生命をもった存在者のことである。生命はまず第一にこれらの存在者の存在が廃棄された統一として捉えることができる。

第二に個々の存在者の存立、統一に対する区別項の存在を指摘しうる。

「諸々の区別はこの単一で普遍的な媒体においてもやはり区別として存在する。というのも、この普遍的流動性がその否定的本性をもっているのは、もっぱらそれが諸区別を廃棄するものであるということによるからであり、もし諸区別が存立をもっていないとすると、この流動性は諸区別を廃棄することができない。」[9]

生命に対してはこのように二つの側面を指摘しうる。しかしながらそれは、生命過程あるいは生命の運動を二つの視点から固定的に捉えたものにすぎない。両側面は結局は一に帰することになる。個々の生命個体は確かに、普遍的生命に対立してそれぞれ自立的に存在する。この場合生命個体にとって、普遍的生命は他者である。しかし自立的であるといっても生命個体は、おのれを維持するために、この他者と関わらなければならない。つまり生命個体は自己保存のため、他の生命あるものを食いつくし、消費する。この行為は、もろもろの生命個体を存立させている普遍的生命が当の生命個体のなかに浸透することを意味する。その結果、生命個体と普遍的生命との対立が解消されることとなる。「生命の単純な実体とは、自分自身を諸形態へと分裂させるものであると同時に、かく存立している諸区別を解消するものである」[10]。生命は個々の生命個体を存立させるとともに、廃棄するという円環運動を通して自己を維持する全体である。

3　生命と自己意識

ヘーゲルは生命について以上のように、統一、区別、再統一の運動を展開させる。そしてさらにこの再統一について次のように言う。「この還帰した統一は最初の統一とは別の統一である。……この統一は単純な類である」[11]。ここでまたもやヘーゲルは突如として「類」概念を持ち出してくる。この類に対して我々は、爬虫類や両生類といった生物学上の通常の類概念をイメージするべきではないであろう。ヘーゲルは単純な類と言っている。最初の生命の統一を抽象的普遍とすれば、この類は弁証法的運動の結果としての具体的普遍を言い表す概念として理解すべきである。そしてこの概念からヘーゲルは自己意識を導き出すのである。

「この類は生命そのものの運動においてはこうした単純なも

のとして自分に対して存在しているのではない。むしろ普遍的統一というこの結果に到達するとともに、生命は自分とは別のある他者、すなわち意識を指示する。この意識に対しては、生命は、こうした統一として、あるいは、類として存在する。」[12]

なぜここで生命は意識を指示するのか。自然界における人間の誕生は、普遍的生命が自分自身を自覚するためのものであったとでもいうのか。この手の論法は普遍を基点にして論ずるヘーゲルにおいては珍しくないが、やはり我々にとっては理解しがたい。いずれにしてもこのような形でヘーゲルは自己意識を再び取り上げる。ヘーゲルは自己意識を、「それに対して類が類として存在し、且つ、自分自身にとって類であるもの」と言っている。自己意識は類を対象とするだけではなく、それ自身が類であると言われる。あるいはまた「単純な自我はこうした類である、あるいは、それに対しては区別が区別ではない単純な普遍者である」とされる。生命の運動の結果としての類と自己意識とが、同じ類という言葉で表現されるのは、具体的普遍である類の運動構造から理解される。おのれをおのれから区別するとともに、その区別を解消し、自分自身との統一を得ているものが、類であり、この運動の点で両者が同じく類と呼ばれるのである。

以上のような生命論を論じた後、ようやくヘーゲルは欲望としての自己意識の運動を展開させる。欲望は対象を無きものとし、そのことによって自分自身が自立的であることを確証し、満足を得る。しかしながら「この満足において自己意識は、みずからの対象の自立性を経験する」[13]とヘーゲルは言う。なぜならこの満足は対象の存在を前提とせざるを得ないからである。対象の存在に条件づけられているが故に、欲望は真に自立的であるとは言えないのである。欲望は、自分を満足させるために絶えず新たな対象を生み出さざるを得ないという悪無限に陥るのである。かくして明らかとなることは、「欲望の本質は、自己意識とは別のものである」[14]ということである。そもそも欲望が自己意識の最初の形態とされたのは、欲望の行う運動が自己意識の基本的な運動に合致していたからである。すなわち、客観的な自己確証の獲得、すなわち対象否定を通じて自己確信を客観的なものとするという運動が、自己意識の運動構造に合致していたからである。しかしここに来てようやく自己意識と欲望が区別されることになる。欲望は、自己意識としての自己意識ではないのである。欲望主体は、生命体として、あくまで普遍的生命の一分肢にすぎない。欲望という個的生命体の自立性は、普遍的生命によって与えられていたにすぎないものである。欲望が行う対象否定の運動は、普遍的生命が自己を維持する過程における、生命自身の自己運動の一部にすぎない。欲望が対象を求めることも、また対象を否定して自己満足を得ることも、すべて普遍的生命の自己運動であると見なしうるのである。

かくして欲望が生命に属すべきものであり、自己意識が本質的に欲望と区別されるとすれば、自己意識は如何なる対象をもつのか。あるいは如何なる対象であれば、自己意識は真の満足

を得ることができるのか。欲望の場合、対象は他の生命体であった。この対象は否定すると消滅してしまう。しかしながら自己意識は対象の否定を通じて自己の満足を得るものである。それゆえ否定のうちにあっても消滅しないものであれば、自己意識は満足しうるわけである。この条件を満たすものこそ、他の自己意識である。「否定」の意味がここでは変質している。生命体、物体としての否定ではなく、精神的な否定である。具体的に言うならば、精神的な否定とは「承認」のことである。他者がみずからの自立性を否定し、私の自立性を承認するならば、私は満足することができ、またその際、対象すなわち他者も消滅することはない。「自己意識は、他の自己意識においてのみ、みずからの満足に達する」[15]のである。こうしてようやく自己意識が自己意識に対する場面、すなわち相互承認論が展開されることになる。

三　承認の概念

自己意識が他者を対象とするに至って、ようやく「精神」が論じられることになる。

「今後意識に対して生じてくるものは、精神が何であるかの経験である。つまりこの絶対的実体が、その対立者、すなわち相異なって独立に存在している諸々の自己意識の完全なる自由と自立性において、それらの統一であることの経験である。すなわち、我々である我、且つ、我である我々という経験である。意識は、精神の概念としての自己意識においてはじめてみずからの転換点を持つことになる。この転換点に立って意識は、感覚的此岸の多彩な仮象と超感覚的彼岸の空虚な夜から、現在という精神の真昼へと歩み入るのである。」[16]

精神がここでは諸々の自己意識間の統一として示されている。ヘーゲルはこの統一の理想形態として承認の概念を展開する。以下、この承認の概念を詳細に見ていくことにしたい。

「自己意識に対して他の自己意識が存在する。自己意識は自分の外に出てしまっている。このことは二重の意義をもっている。第一に自分自身を失っている。というのも、自己意識はみずからを他の実在として見出すからである。第二に自己意識はそれとともに他者を廃棄している。というのも、自己意識はまた、他者を実在とは見ずに、他者のうちに自分自身を見るからである。」[17]

私が他者と向き合うとき、自分にとっての私と、他人にとっての私が区別されうる。対他存在としての私に着目すれば、私は自分の外に出ているということができる。対他存在としての私は、対自存在としての私にとっては、他の存在であり、その点で自分を失っている。しかしながら対他存在としての私も、私であることに他ならないのであるから、他者のうちに他者そのものを見ているのではなく、自分自身を見ているのである。対他存在としての私、すなわち「他の私」は、「他」を強調するときと、「私」を強調するときとで、二重の見方が可能なのである。他者の存在を認めることには、このような二重の意義

がある。

しかしながらそもそも自己意識は、自分の自立性を確信し、自分以外の存在の否定を目指すものであった。自己意識と自己意識が向かい合っているこの場面でも、自己意識は他の自己意識の存在を否定しようとする。

「自己意識はこのみずからの他在を廃棄しなければならない。このことは最初の二重の意義の廃棄であり、それゆえそれ自身第二の二重の意義である。第一に自己意識は、他の自立的実在を廃棄し、そのことによって自分が実在であるとの確信を生成させることに向かわなければならない。第二に自己意識は、そのことによって自分自身を廃棄することに向かっている。というのも、この他者は自己意識自身だからである。」[18]

対象が自己意識以外のときと異なり、他の自己意識は、対他存在としての私を存在させる場である。他者の存在を認めず、否定するということは、他者の内なる私を否定することになる。二重の意義を有する他者の存在を否定することは、それ自身二重の意義をもつことになる。

自己意識は他者の存在を否定することによって、自分の他的なあり方から自分のうちへと還帰し、自分の自立性を確認する。この自己内反省も二重の意義をもつことになる。

「二重の意義をもつみずからの他在のこのような二重の意義をもつ廃棄は、同様にまた二重の意義をもった自己内還帰(Ruckkehr in sich selbst)である。」[19]

一方で自己意識は、他者否定によっておのれの対他存在を否定し、対自存在を回復する。しかし他方、おのれの対他存在の否定は、他者の内に存在している私を否定することであるから、私が自己内に還帰することは、他の自己意識をも自由に解放し、自己内還帰せしめることになる。

このように自己意識と自己意識が相対する場面において、「他者の存在の肯定」、「他者の存在の否定」、「自己内還帰」という三側面が述べられている。いずれの場面においても言えることは、自分の存在は他者の存在と分かちがたく結びついている、ということである。他者の存在を認めることは、自分の存在を否定することであると同時に肯定することであり、他者の存在を否認することは、自分の存在を肯定することであると同時に否定することでもある。ところで、この他者も、おのれと同じような自立的存在者である。上の説明は一方の自己意識からのものであったが、それは自立的存在である他者にも当てはまる。「他者肯定—自己否定」、「他者否定—自己肯定」の運動は相互的でなければならない。両者は互いを承認しあうものとして、互いを承認するのである。

ヘーゲルは「自己意識が即且つ対自的に存在するのは、自己意識が他者に対して即且つ対自的であるというとき、またそれを通じてのことである。すなわち自己意識は、承認されたものとしてのみ存在する」[20]と言っている。人間は他者との関係を取り結ぶなかで初めて、現実的に存在していると言える。他者との関係の中でおのれが何であるか、自己のアイデンティティが確立されてくる。自分にとっての自分と、他人にとっての自分

との統一において、即且つ対自的な私の存在、現実的な私の存在が確立するのである。他者があって初めて、私が現実的に存在しうるのである。

さて以上の承認の概念の分析から、先に自己意識間の統一として述べた精神の概念をより明確に規定することができる。すなわちその統一は、「みずからの他在と自分自身との統一」なのである。自己意識は他者と向き合うことによって、対他存在に成りさがるが、再びこの他的存在から環帰し、自分自身との統一を回復する。みずからの他在と自分自身との統一が「精神」なのである。

四　無限性と精神

小論の主題は、ヘーゲルの「精神」概念を『現象学』の自己意識章を手がかりに解明するということであった。これまでの考察を振り返ってみれば、自己意識は、自己、生命、他の自己意識を対象とした。そして「これら三つの契機において初めて、自己意識の概念が完結する」[21]とされる。ところで、これらに共通しているのは「無限性」の概念である。相互承認も「自己意識において実現される無限性」[22]と規定されている。それゆえ最後に、無限性と精神との関係を論じることにしたい。

無限性は既述のように悟性の運動においてはじめて現れてきた概念であり、そこでは次のように述べられている。

「この単純な無限性、換言すれば、絶対的概念は生命の単純な本質、世界の魂、普遍的な血と呼ばれるべきものである。この血は、至る所に現在し、いかなる区別によっても濁らされも妨げられもせず、むしろそれ自身あらゆる区別であり、また区別の廃棄された存在である。それゆえそれは、みずから動くことなく自分のうちで脈打ち、不安定になることなく自分のうちで振動している。」[23]

無限性は、統一と区別の統一の運動を言い表す思弁的概念である。あらゆる存在者のうちにこの無限性を認めることが、ヘーゲルの哲学的認識であったと言って良い。自己意識論に即して言えば、まず自己意識の基本構造が無限性であった。「私は私である」という自己意識の基本構造において、区別は直ちに廃棄される区別であり、そのまま統一である区別である。次に自己意識の対象とされた生命も無限性の構造をもっていた。生命はみずからを区別し、個々の諸形態に存立を与えるとともにこの区別を廃棄することによって、自己を維持する普遍者であった。最後に自己意識は他の自己意識と向き合い、「自己意識において実現される無限性」としての相互承認の運動を行った。

さて無限性と精神との関係であるが、まず精神が無限性の構造を有していることに着目しなければならない。先に精神を「みずからの他在と自分自身との統一」と規定したが、これは統一と区別の統一と言い換えても良い。では自己意識論における無限性がそのまま精神を意味するかと言えば、そうではない。自己意識の基本構造としての無限性、生命としての無限性、相互承認としての無限性、という三つの無限性のうち、第一のもの

は、概念形態における精神、第三のものは、実現形態における精神と言いうるが、第二の生命は精神とは呼ばれない。精神は自然より高い、というのがヘーゲルの基本認識である[24]。生命は精神と同じ無限性の構造を持つものの、未だ精神ではないのである。精神はあくまで自己意識に特有のものである。両者を区別するのは、自覚の契機、知の契機の有無である。生命は無自覚的存在であるのに対し、自己意識は自覚的存在である。知の契機が精神に特有のものであるとすれば、「みずからの他在と自分自身との統一」という精神の規定は、「みずからの他在において自分自身を知ること」として定式化されうる。かくして精神とは知性的存在者の営みにおける無限性であると言えよう。

以上、これまでの考察から精神の基本構造が明らかになったと思われる。この考察はヘーゲルの精神概念を全面的に解明するための予備的作業にとどまるものである。全面的解明は今後の課題としていきたい。

註

ヘーゲルの著作は次の全集を使用する。

G. W. F. Hegel, *Werke in zwanzig Bänden*, hrsg. v. E. Moldenhauer und K. M. Michel, 1970ff.

第三巻『精神現象学(*Phänomenologie des Geistes*)』については、ページ数のみ、それ以外は巻数のローマ数字とページ数を記す。

(1) II,S.25. (2) X,S.29. (3) S.145. (4) S.139. (5) S.144. (6) S.139. (7) S.139. (8) S.140. (9) S.140. (10) S.142. (11) S.142f. (12) S.143. (13) S.143. (14) S.143. (15) S.144. (16) S.145. (17) S.146. (18) S.146. (19) S.146. (20) S.145. (21) S.144. (22) S.145. (23) S.132. (24) II,S.503.

(すずき・さとる　筑波大学哲学・思想学系)